

## 環境教育センター活動報告

### ①「四季の遊び－秋の虫捕り－」

担当 野村 宗 嗣

環境教育センターでは、活動の一環として自然環境を通しての学びの場を設定し、幼児・児童・生徒と教職や保育職をめざす学生の学びというものを育めるよう、活動を進めてきています。

今年度は、フィールドセンターを会場にして行った「四季の遊び－秋の虫捕り－」の活動を報告させていただきます。

#### (1) 四季の遊び

環境教育センターでは過年度より四季に応じた自然環境からの学びというものをテーマに、活動内容を考えてきました。大学を訪れた子どもたちが、学内の自然環境の中にある四季折々の遊びを見つけ出し、季節を感じながら遊び、遊びを通して、子どもたちが四季の移りかわりや四季ごとの自然というものを、感じたり、人との関係やものごとの関係を理解したりしてくれればということころです。

また、四季ごとの遊びだけでなく、四季の移りかわりを感じたり知ったりする活動も行いました。昨年は冬の季節に秋を見つけようということで、冬の季節に落ち葉やどんぐりを拾い、絵具で赤や黄に色付けして秋を装い、版画をつくりました。子どもたちが活動を通して2つの季節を感じ、冬の季節に秋を表現するといった活動でした。

#### (2) 虫捕り

今年は、季節の遊びとして「秋の虫捕り」を行いました。場所は大学のフィールドセンターにある小川の周辺の草々がほどよく生えているところでは、大学の関係園の子どもたち30名、子ども教育学科の学生と先生、環境園芸学科の学生と先生です。環境芸学科からは、虫の研究をされている先生に参加していただいたことから、虫網での虫の捕まえ方や、手で虫を傷つけずにつかむ方法を伝授してもらうことができました。虫捕りの秘訣としては、バッタは跳ぶとビョーンと長く跳ぶので、着地点までしっかり目で追い、そば

にそっと近づいて上から虫網をかぶせること。虫網をかぶせたら片手を虫網の中に入れて、バッタの後ろ足を指でつまむか、手の指をかるく握り、手の全体を丸くして、できた手の中の空間に虫をいれてしまうといった方法です。子どもたちは実際に虫取りをすることで、生きている虫を、やさしく捕まえることを学んでいました。

秋の虫捕りとあって、生い茂る草の中からコオロギを見つけ出し、捕まえる子どももたくさんいました。コオロギを一人の子どもが見つけると、それを見て自分も捕まえようと、生い茂った草の中を、目をくまなく動かし、コオロギを探す子どもの様子があちこち見られました。「自分で捕まえた!」「どこにいるんだ」と真剣に草の中にコオロギを探す子どもたちの姿は、真剣そのものでした。「見つけた、つかまえるぞ」という思いと裏腹に、虫網をかぶせても草の茂っている下の方にコオロギがいるものですから、虫網の中に手を入れても草が邪魔をして、なかなかとらえられません。知らない間にどこかに姿を消すコオロギに、またまた目を生き生きと輝かせ、虫をさがしては虫網を又かぶせる子どもたちの姿がありました。

そんな子どもたちの上空を、たくさんのトンボが飛んできました。たくさん飛んでいるのに、捕らえるのは難しいです。トンボを目で追い、「エイッ」と虫網を振り回しても、とっくにトンボは彼方に飛んでいってしまっています。そこに登場するのは、前述で紹介した虫博士です。勝手にそのような呼び方をして恐縮なところですが、その先生は簡単に虫網でトンボを捕獲してしまい、そ

の様子を目の前で見た子どもたちには、まさに「虫捕りの天才、虫博士現る」です。その後、子どもたちは虫博士に、次のようにトンボの捕り方を伝授されました。虫網を頭上に構え、近くにトンボが飛んできたら、虫網をかぶせるという方法です。虫網をかまえて飛んでくるトンボを捕らえるので、「飛んで火に入る夏の虫」とはニュアンスが少々違いかもしれませんが、「飛んできた、虫網に、入れてしまおう秋のトンボ」といったところです。そんな方法も教えてもらい、あっという間に大収穫の子どもたちでした。しかしながら、トンボも含めた虫たちは、数日間の観察用の虫を除いて、草原と空に帰っていきました。もちろん子どもたちの観察活動のため、虫かごに残ったバッタにコロギ、トンボも数日後には、草原と空に帰っていきました。子どもたちにとっては、なごりのあるお別れだった様子です。

### (3) 虫捕りを終えて

参加した学生からは、「生きて動いている小さな虫たちへの子どもたちの興味関心と、虫を見つけたときや虫を捕まえたときの子どもたちの満面の笑顔や、虫を逃したときの残念な気持ちといった表情というものを目の前で見ることができ、先生をめざす自分にとっては、それが大切な原動力になっていくのかな」といった感想を聞くことができました。

また、参加された先生たちからは、「子どもたちと一緒に活動することで、子どもたちが持っているものごとへの興味・関心・意欲といったものが、それが成長の原動力となり、子どもは自分でドンドン自分を成長させていくのだということを、虫捕りを子どもたちと一緒にすることで身にもって感じる事ができたし、それが教職や保育職についた喜びであり、仕事をつづける原動力になっているんだな」といった感想を聞くことができました。

今後も、四季の遊びを通して、自然環境の中での遊びを通して、子どもたちの学びと学生諸君の学びを育んでいければと考えます。